第130回簿記検定試験 3級 出題の意図・講評

【第1問】

（出題の意図）

本問は3級で学習する内容の取引についての基本的な仕訳問題であり、適切な勘定科目を使うことができるかどうかを問うています。それゆえ、解答に際しては格別難しい点はないと思われます。各取引の解答に際して注意をしておくべき点は以下の通りです。

1. 受取金額が不明の場合には仮受金として処理すること。
2. 商品売買に先立ってあらかじめ授受される手付金の処理の問題であること。
3. 給料として支払われる金額から控除される社会保険料や所得税など従業員からの預かり金の処理の問題であること。
4. 当店振出の小切手の回収は当座預金勘定で処理をするということ。
5. 手持ちの受取手形の割引処理に関する問題で、割引金額を手形売却損として認識すること、また、この割引料の計算が日割りできちんとなされていること。

（講評）

この問題で扱われている取引は、商業において絶えず日常的に発生するものであり、3級の学習内容の中でもしばしば取りあげられるものです。いうまでもなく、仕訳の作業は簿記の学習の基本であり、スタートでもあります。それゆえ、簿記の学習では仕訳を正確に行うことが何よりも肝要です。仕訳の問題で最も大事なことは、勘定科目を正確に使うことができるかどうかということです。

今回は、前払金と仮払金、および前受金と仮受金の区別が十分でない答案が多く見受けられました。債権と債務の内容と、それら勘定が使用される取引についての理解を十分にしてください。また、当店振出の小切手は現金ではなく、当座預金の増加であることに注意をしてください。この点の理解が十分でない答案が多く見受けられました。

正答率が約70%と高いことから、この問題の取引についての理解は十分であると考えられます。しかし、仕訳がきちんとして行われていなければ、その後の試算表の作成、財務諸表の作成にまで影響が及ぶので、仕訳の作業は常に間違いの無いように行う必要があります。仕訳問題は常に満点を取って欲しいものです。

【第2問】

(出題の意図)

本問は、問題文に与えられた取引にもとづいて、得意先元帳の各勘定の金額を求め、売掛金明細表を完成させることで、得意先元帳に対する理解を問うために出題しました。

得意先元帳は、売掛金の内訳・明細を記録する補助元帳です。本問では、直接、得意先元帳を作成させる問題ではありませんが、得意先ごとに人名勘定を開設して、売掛金の増加・減少を記録します。したがって、現金による売上や手形による売上は含まれませんので、注意してください。また、値引や返品、それから前受金や手形も絡んでいますので、総合力が試される問題でもあります。

(講評)

複雑な取引は全くありませんが、一つ一つを丁寧に仕訳しながら宮城商店、岩手商店、および福島商店に対する売掛金の金額を加減する必要があります。満点の答案が多かったですが、①16日の福島商会の売上で前受金を充当していない誤り、②21日の福島商会への売上で為替手形の受け取りの処理の誤り、あるいは、③30日の為替手形の振り出しの処理の誤り、といったミスが多く見受けられました。

【第3問】

(出題の意図)

本問は、平成24年1月31日付の合計残高試算表を作成させることによって、各種の取引を正しく仕訳し、さらに正しく集計することができるかを問うために出題しました。

平成24年1月中の取引の量はそれほど多くはないので難易度自体は高くはありませんが、「現金売上」は現金取引(収入)と商品売買取引(売上)、「現金仕入」は現金取引(支出)と商品売買取引(仕入)、同じく「当座預金からの引出」は現金取引(収入)と当座預金取引(減少)、「当座預金への預入」は現金取引(支出)と当座預金取引(増加)、さらに「小切手振出しによる仕入」は当座預金取引(減少)と商品売買取引(仕入)、と両方に記載があるので、二重に仕訳しないように注意する必要があります。

また、電話料金の一部は店家主計の利用分ですので、資本の引出しとして処理しなければなりません。本問では引出金勘定を用いるという指示がありま

すので、資本金を減少させてはならないこととなります。

(講評)

本問は、取引量はそれほど多くなかったものの、合計残高試算表を作成する問題であるため、合計欄と残高欄の両方を埋めなければならない、意外に時間がかかったのではないかと思います。高得点の答案が目立ちましたが、①売掛金・買掛金、②通信費の誤りが多かったです。

また、借方合計欄の合計額と貸方合計欄の合計額は必ず一致しますし、借方残高欄の合計額と貸方残高欄の合計額も必ず一致するので、最後に検算をして合計額が一致していない場合はどこかが誤っているはずで、その場合はもう一度確認してください。

[第4問]

(出題の意図)

本問は、店舗の継続した賃借契約締結後に生じる取引の流れを、簿記の手続きとともに理解し、その勘定記入を問うものです。帳簿記入の形式では過去に出題済みであり、今回の出題の方がより基本的な問題となっています。問題の中で、勘定記入の手順を詳細に示しているため、そのとおりに処理すれば解答できますが、本来は、時間の流れとともに賃借契約後に発生する処理を自ら考えなければなりませんので、これらの取引とその処理を一連の流れとしてとらえて頂けるように出題しました。

(講評)

答案を見て気付いたことは、簿記の手続きを正しく理解して学習されている方が少ないということです。正しい学習方法で、基本を身に付けるように心がけて頂ければと思います。その為には、契約の締結以後発生する一連の取引を推定し、仕訳し、勘定記入につなげられるように学習することが大切です。

[第5問]

(出題の意図)

本問は、資料として与えられた [決算整理事項その他] にもとづいて、答案用紙にある残高試算表欄記入済みの8桁精算表を正しく完成させることを問うものです。精算表作成問題としては基本的かつ標準的な内容の問題といえます。

解答にあたっては、8桁精算表の仕組みと作成手順を正しく理解しているこ

と、決算整理事項その他について修正仕訳を正しく行うことができることがポイントとなります。決算の意味や手続きに関連づけながら、精算表について正しく理解しておくことは、簿記の学習にとって極めて大切なことです。また、現金過不足や仮払金の決算処理、貸倒引当金の設定、売買目的有価証券の評価替え、商品や消耗品の期末棚卸、固定資産の減価償却、支払保険料の繰越しや支払利息の見越しなどの基本的な決算修正事項について、修正仕訳を正しく行うことができることも、簿記の学習にとって極めて重要なことです。本問のねらいは、このような簿記の基礎知識と能力の有無を確かめることにあります。

(講評)

精算表作成問題としては基本的で比較的やさしい問題であったため、満点またはそれに近い高得点の答案が多かったと思います。しかし、その一方で、ほとんど得点の取れていない答案、あるいは誤答の多い答案も少なからず見受けられました。

比較的よく正答できている答案で目立ったのは、加算と減算を取り違えた集計ミスや計算上のケアレス・ミス、借方項目と貸方項目の取り違い、損益計算書項目と貸借対照表項目の取り違いなどです。

また、ほとんど得点の取れていない、あるいは誤答の多い答案については、解答時間が足りなかったというケースもあるでしょうが、やはり基本の学習が不足しているのではないかと感じました。精算表は決算全体の流れを見通すために作成する計算表ですので、決算の意味や手続きに関連づけながら基本的な学習をしっかりと行うことが大切です。